

氏名	飯山千枝子
学位の種類	博士(社会学)
報告番号	乙第314号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	アメリカ合衆国南西部 プエブロ・インディアンの 土器製作における 伝統の変容
審査委員	(主査) 阿部 珠理 生井 英考 三浦 雅弘 間々田 孝夫 佐藤 円 (大妻女子大学比較文化学 部比較文化学科教授)

I. 論文の内容の要旨

本論文は、アメリカ先住民プエブロ・インディアンの土器（以後、プエブロ土器と略称）の製作を事例に、アメリカ併合から現代までの160年余を射程として、土器製作の伝統の変容を、文化的、通時的にとらえ、歴史の動態や白人社会との関連から考察している。プエブロ・インディアンが土器製作を駆使して新たな環境と向き合い、「滅びゆくインディアン」というスティグマに抗して、プエブロ・アイデンティティを保持しながら、時代に適応してプエブロ文化を再構築し、土器製作を発展させてきたことを明らかにしている。

第1章では、アメリカ領有の近現代に入る前史として、土器製作の基盤となった先史時代と歴史時代—スペインおよびメキシコ統治時代が考察される。先史時代に、交易、農耕、儀礼が発達し、農耕が社会生活の基盤になると、降雨や豊穡の祈りを表象する文様が土器に描かれるようになり、現在に至る伝統が形成されていった。スペイン統治時代に、先住民文化は激しい弾圧を受け、土器製作は入植者の日用食器や教会用具に特化する一方で、隠れて儀式や伝統的土器製作が続けられた。土器製作の継続性は、1300年代から1838年まで定住されたペコス・プエブロを事例に、考古学者アルフレッド・キダーに依拠して例証されている。メキシコ統治時代は自由な時代であり、先史時代のアナサジ文様を取り入れた伝統的な土器が広く製作されていた。先史時代から歴史時代の終わりまで、人びとは土器製作の伝統を自在に変容させ、白人の政治的・宗教的弾圧を切り抜けてきたことが考察されている。

第2章から第7章は、19世紀末から現在までの近現代を対象にしている。まず第2章では、19世紀末に台頭した交易商人とインディアン・キュリオを取り上げ、プエブロ土器を含めたインディアンの手工芸品が、インディアン・キュリオとして東部都市に通信販売された実態を、通信販売カタログを年代順に比較検討することで明らかにしている。白人交易商人が、先住民の手工芸品の製作や販売に深く関与していることが示され、20世紀初頭の東部社会におけるインディアン趣味の大流行や、アーツ・アンド・クラフツ運動とキュリオの関係が分析される。アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を強く受けるアメリカン・アートの中で、手工芸品のコピーや「インディアン性」の盗用という問題もおきるが、インディアン・キュリオは、大衆に広範に受け入れられていたことが確認されている。他方高品質な伝統土器がアート教育の見本となり、ホピのナンペヨの土器が博覧会に出展されるなど、カタログ販売されたキュリオが、インディアン・アートに目を向けさせる契機となったことが明らかにされている。

第3章では、1880年に鉄道が南西部に開通し、サンタフェに観光が導入され開発されていく過程を検討し、プエブロ社会の経済的環境が激変するなかで、土器の作り手た

ちが、土器の商品化と小型化を図り、白人がインディアンに抱くイメージを逆手にとって、白人好みのみやげ土器の製作に積極的に取り組んだことを明らかにしている。同時に、みやげ土器の生産の陰で、伝統的土器も製作されていることが示され、こうした土器製作の二面性は、ミシェル・ド・セルトーが「戦術」と呼んだ民衆の「もののやり方」、すなわち弱者ゆえの臨機応変の実践と言えるのではないかと考察している。19世紀末から20世紀にかけて始まった南西部観光の導入は、先住民文化の発信と手工芸品の販売によるプエブロの人びとの経済的支援を目標とした白人学者グループと、南西部旅行を誘致して収益を上げようとするサンタフェ鉄道とハーヴェイ社のビジネスグループによって進められたことが提示される。その結果として、「芸術の町サンタフェ」が誕生し、サンタフェは南西部観光の中心的役割を担っていく。南西部の観光開発が、プエブロの土器製作における伝統の変容を引き起こし、土器の性格を大きく変えたことを確認すると同時に、観光客が土器販売の新しい大きな市場となったことが明らかにされ、土器の作り手たちが押し寄せる白人文化に適応して、土器製作の伝統を変容させつつ、新たな観光時代を漸次切り抜けていったことが提示されている。

第4章では、前章で言及したみやげ土器生産の影響を受け、質の低下がみられたプエブロ土器を復興させようとする、白人主導の土器品質改良運動「サンイルデフォンソ・プロジェクト」を取り上げている。プロジェクトを主導した考古学者エドガー・ヒューエットと美術家ケネス・チャプマン二人の古代土器への傾倒から、古典的な質のよい伝統的土器の製作が奨励され、「真正性」が重要視されたことで土器の質の向上が見られたが、結果として、土器製作の方向が固定されていったことが検討されている。プロジェクトの最終過程で、サンイルデフォンソのマリア・マルティネスと夫フリアンが「黒地黒彩様式」を発明し、マリアの自作品へのサインとともに、プエブロの伝統的慣習を破った新しい伝統が付け加えられたことが明らかにされている。さらに、現在のサンタフェ・インディアン・マーケットに継承される第1回のマーケットが、1922年にヒューエットにより創出されたことを、ニューメキシコ博物館の機関誌 *El Palacio* に依拠して提示している。1900年代から1940年代の土器品質改良期の製作伝統は、プロジェクトの強い影響や真正性を標榜する新しいマーケットの要求を受けて、古典を手本とする伝統的土器への回帰という変容を見せたことを確認している。

第5章では、1950年代から1970年代のアメリカの公民権運動とインディアンの復権運動を視野に、土器製作の伝統を含めたプエブロ社会の文化的アイデンティティの構築に着目している。まず、前章で言及した品質改良運動の成果として、プエブロ全体で上質な伝統的土器が復興し、1950年代には優れた規範的土器製作者を輩出して、伝統的プエブロ土器製作の隆盛に寄与したことが提示される。プエブロ土器製作の伝統の変容は、古代様式を引き継ぐ保守的な傾向にあったが、土器は1970年代にかけ、より洗

練された精巧な美術工芸品となり、プエブロ・インディアンの伝統文化を表すものとしてプエブロ全体のトレードマークとなっていくことが確認される。1964年に、コチティのヘレン・コルデロが発明した塑像型土器「ストーリーテラー」は、各プエブロに急激に広まり、その製作を通して汎プエブロ文化が形成されていったことを、阿部珠理が論じた伝統の広域化と汎インディアン文化への融合の事例であるパウワウに依拠して考察している。汎プエブロ文化形成の要因は、ストーリーテラーを製作することによって、ストーリーテリングというプエブロ文化の深い基盤にある伝統に参加することが出来たからであり、プエブロの人びとが共通して持つ「語ること」の意義と精神性をストーリーテラーは象徴し、人びとの紐帯を強めて汎プエブロ文化が創出されたと分析している。

第6章では、1980年代から1990年代の革新的土器製作への動きを追い、土器製作者たちを革新への先駆者、現代的伝統派、現代的革新派に分けるチャールズ・キングに依拠して、それぞれの作品を検討し、それらに製作者の経験の広がりや問題意識、美意識や造形表現の願望などの内発的要因が強いこと、ギャラリーの支援やサンタフェのアート環境が影響していることを明らかにしている。さらにプエブロ社会とアーティストの関係を、エドウィン・ウェードの論文を引用しつつ、革新的土器製作に対するプエブロの人びとの反応を提示し、プエブロの伝統や価値観、慣習が革新的なアーティストの縛りになっていることを論じている。また1962年に設立されたアメリカ・インディアン・アート研究所（IAIA）を取り上げ、徹底した自己表現が求められるアート教育を検討し、IAIAの白人によるアート観や現代絵画表現に対して、プエブロのアーティストが激しく反感を抱いたことが言及される。しかし、IAIA陶芸科のプエブロ・インディアンの学生は、ホピの陶芸彫刻家オテリーの指導を受け、革新的土器製作に取り組んでいったことが例示される。プエブロ文化や信条を体現するというプエブロ社会の要請を充足させることが、伝統的土器の意義であるならば、現代作家は、自身の芸術的意義と充足を求めて作品を製作し始めたのであり、伝統的土器の保守的な製作への反動をも含むような複合的要因が、土器製作の伝統の変容を促したことを考察している。

第7章では、現代プエブロ土器製作における多様性に着目している。革新的陶芸家の作品を分析し、革新的土器の対抗軸としての伝統的土器を、伝統の継続という視点から考察している。前者では、伝統的な土器の機能を消滅させ、デザインや技巧に重点を置くことで新たな表現力を得た作品や、プエブロの自然観や儀礼のシンボル、歴史の文脈の掘り起しが試みられている。他方、後者には、プエブロ社会に根付く実用土器への愛着や伝統の継続の要請があることを明らかにし、さらに、伝統的土器の販売に大きな影響力を持つサンタフェ観光について、サンタフェ市のランディ・ランダル観光局長へのインタビューを提示して、インディアンやその文化がサンタフェ観光の目玉として位置

づけられていることを確認している。続いて、現代作家への聞き取り調査を、プエブロ内に居住する伝統的土器作家と、プエブロ外の革新的作家の二つのグループに分けて提示し、プエブロ社会への帰属意識や伝統意識を論じている。そこから分ることは、革新的作家も伝統的作家も、全員のなかに文化に根差した伝統意識が認められたこと、革新的作家が外部社会との交渉関係のなかで、内発的に外部の材料や新しい技法を積極的に取り入れ、伝統の革新と常に新しい自己表現を試みている一方で、伝統的作家は、最初の聞き取り調査から 20 年近く経たにも関わらず、その製作信条や製作方法は伝統に則って揺らぐことなく継続されており、強い帰属意識が個人的表現を上回っていることが明らかにされている。2000 年代における土器製作の伝統の変容は、個人の芸術性の追求や、造形表現の欲求が突出したものであり、プエブロ土器の多様性は、ますます複雑に広がりながら、古代の器とも繋がりを持ち、土器のデザインは先史時代までを包含する。土器製作を豊かにし、プエブロ社会や文化の原動力となっていくものが、プエブロ土器の多様性にあり、それに伴う伝統の変容・生成にあることを論じている。

終章では、1 章から 7 章の内容を振り返った上で、現在のプエブロ土器は、実用に耐えるものから、みやげの小品、民芸的なもの、伝統的なもの、芸術のための芸術作品まで、多種多様になっていることを確認している。土器製作の伝統には、古くは自由で広大な交易や、スペイン、アメリカによる政治的、軍事的、文化的弾圧や奪取、それらに対応する土器製作の二面的試みや観光客の取り込みなど、無数の交渉や駆け引きの重層的で多面的な複合性が存在する。一見、白人の関与のままに動いてきたように見える作り手も、その白人の意向をくみつつ、工夫し、白人学者をはじめ観光客が求める真正性や本質主義を逆手にとる形で、自分たちのアイデンティティの表出である土器製作を行ってきたことを確認し、土器製作の豊かさは、先史時代の伝統的土器から革新的現代土器までに広がるプエブロ土器の多様性にあることを評価している。プエブロの人びとが、プエブロ社会を取り巻く歴史の動態の中で文化を再構築し、あるいは伝統を生成しつつ、しなやかに辛抱強く、かつ臨機応変に土器を作って生き抜き、その一連の生き方によりプエブロ土器製作の伝統は大きく変容してきたと論文を結んでいる。

II. 論文審査の結果の要旨

本論文は、要旨に示された通り、アメリカ南西部先住民、プエブロ族において伝統的な生活工芸として受け継がれてきた土器製作が、社会の近代化と文化の植民地化の過程にさらされながら体現してきた文化変容の様態を歴史に沿って概観し、その広い視野のなかにプエブロ土器の現在とその文化的な意義を位置づけた意欲的な論考である。

審査委員会・公聴会において、本論文には以下のような評価が与えられた。

第一に、プエブロ土器という、物質文化の成果物、つまりモノを通して、プエブロ社会の伝統の変容、伝統の再生や、新たな創造を考察するという研究枠組みのオリジナリティに高い評価が与えられた。これまでのプエブロ・インディアン研究は、19世紀末の遺跡発掘調査による考古学研究に始まり、その後、人類学の観点から、文化・社会的側面やプエブロ族の気質など精神の働きに関わる研究、アメリカ合衆国との関係を政治政策史の面で捉えるもの、またプエブロの伝統工芸を形態論的に編年研究するものがほとんどであった。飯山氏の研究は、2000年という歴史の長いスパンの中で、モノを通じて見た先住民プエブロ族の伝統刷新のダイナミズム、プエブロ族のリバイタリゼーションを描出することに成功しており、この点に高い独創性がある。

第二に、社会関係、白人社会との交渉に着目し、それらを通してプエブロ土器の伝統の変容、その形態や意匠の変化を説明するという手法は、極めて説得的である。筆者は、まず、プエブロ土器の変容の画期となる四つの時期を確定する。それらはそれぞれ、「1880年の鉄道開通前後」、「1900年～1930年代の土器品質改良期」、「1950年～1970年代の汎プエブロ文化創出期」、そして「1980年代～2000年代の現代作家誕生期」であり、さらに各々の時期におけるプエブロ・インディアンと白人との接触、交渉に焦点をあて、時代と関連づけることによって、議論の整合性、説得性を十分に満たしたことは高く評価できる。例えば、鉄道開通期には、サンタフェ鉄道会社を含む観光業者、鉄道開通によって彼らの居住地域に流入する観光客の要請に応じて、土産物としての土器の商品化が始まり、さらに、交易商人の台頭と彼らとプエブロ・インディアンの交渉過程から、商品化された土器が「インディアン・キュリオ」として、観光客ばかりでなく、アメリカ市場に広く販路を広げたことを例証している。土器品質改良期では、エドガー・ヒューエットやケネス・チャップマンを代表とする白人学者グループが主導する「サンイルデフォンソ・プロジェクト」へのプエブロ・インディアンの参画が、土産物として一部粗製濫造の弊害に陥った土器の品質を格段に向上させ、伝統的作品回帰が促される一方、マリア・マルティネスのような傑出した個人作家が誕生したことなど、具体的事例によって、伝統の変容とそれをもたらした社会関係が論証されている。

第三に評価に値するのは、「エージェント」としての先住民の定位である。「消え行く

民」のスティグマを刻印され、現実的にも植民地化の犠牲者であったアメリカ先住民は、これまで歴史の「被害者」として平板に語られることが多かった。本論では、プエブロ土器の伝統の変容が、白人社会に単に強いられたものではなく、プエブロ・インディアンが白人との接触の場面でその時々に応じた柔軟な対応をしつつ、白人の要請に屈するのではなく、その要請に選択的に応え、主体性を保持してきた所産であることを明らかにしている。換言すれば、土器の変容は、生き残りをかけたプエブロ・インディアンの「民衆の戦略」とも関わり、彼らの力強く生き抜く原動力をその変容の中に看取している点に、高い評価が与えられた。

第四は、インディアン・アート研究所(IAIA)における「教育」への、従前とはことなる解釈の提示である。無文字の伝統を持つインディアンの学校教育は、絶えず「同化教育」の文脈で語られてきた。本論では、プエブロ伝統社会との軋轢を生みながらも、教育機関として誕生したサンタフェのインディアン・アート研究所が、プエブロの伝統工芸の継承と、民具ではなくアートとして独立したプエブロ土器を制作するアーティストの育成という両義的役割を担ったことを明らかにしている。一見背反する二つの役割だが、伝統的プエブロ土器とアートとしてのプエブロ土器がアメリカ社会で高い評価を得、総じてプエブロ土器の多様性の確保に貢献したという視点は、それらの作品を生み出したインディアン・アート研究所への評価であり、明らかにこれまでのインディアン教育観を刷新している点で重要である。

第五に、第2章の「インディアン・キュリオ」に関する議論のオリジナリティと面白さは群を抜いている。とりわけ「インディアン・キュリオ」の通信販売を論じた考究は、管見の限り類をみない。論者はキュリオの販売に関わった交易商人たちを丁寧に洗い出し、その関わりの具体である手法や販路開拓の実際について詳細な分析を加えている。また取り上げられた通信販売カタログは、貴重な資料的発見といってよい。さらに「インディアン・キュリオ」をアーツ・アンド・クラフト運動との関連で論じる視点も新鮮でかつ妥当性があり、新資料の発掘とともに、アメリカ・インディアン研究、さらにはアメリカ文化史研究に対する大きな貢献となっている。

第六に、プエブロ土器に対する強い愛着を背景に、プエブロ土器の全容を読者に説明しようとする網羅性は、時にはカタログ的ではありながら、プエブロ土器に関する基本的な情報を読者に伝え得ており、論者の情熱は賞賛に値する。

第七に、大学院生になる前から現地に出向き、長年にわたってインフォーマントとの接触を継続してきた論者のフィールド研究の努力は、高く評価された。観光が盛んな地域であるだけに、観光客的な接触の仕方を越えるプエブロの人々との関係構築は、難しさを伴うものであったと思われるが、筆者の大部のインタビュー資料の成果は、現代作家の意識分析に結実している。

第八に、インタビュー言語の英語の堪能は、文献読解でも発揮されている。分野の性格上、文献はほとんど英文であるが、論者は広汎に資料を渉猟し、英文文献・資料を十分に咀嚼した点にも評価が与えられた。

審査委員会では、以上のように筆者飯山氏の研究がさまざまな注目すべき成果を生みだしていることについて、一致した評価が得られた。特にプエブロ土器の変容を通じて社会関係を見る視点、変容の画期の指定、インディアン・キュリオについての研究成果のオリジナリティには、非常に高い評価が得られた。

とはいえ、本論文にはいくつかの問題点も指摘された。

まず、本研究が通時的研究である以上、第2章、第3章において「鉄道の敷設と観光業の興隆」を論じる際、南西部がアメリカ合衆国に編入されたことの意味や、同化政策や貨幣経済の浸透などのプエブロ族への政治的、経済的、社会的影響について今後論じることが必要になろう。

またミシェル・セルトーやジェームス・クリフォードなどの先行研究から理論を援用して自らの議論の論理性を高めようとしているものの、先行研究の理論の理解がやや不十分な観があり、例えば「伝統」という概念や用語の使用法に関して、文脈上の齟齬が生じないよう今後時間をかけて整理する必要があるとの意見も出された。

こういった問題点を含むとはいえ、本論文は上記の通り大きな成果を生み出しており、審査委員からは、一致して水準の高い研究であるとの評価がなされた。

よって審査委員会は、本論文が博士（社会学）学位論文としてふさわしいものであるとの結論に達した次第である。